

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科 1年

氏 名: 金子 卓磨

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回、私は太平洋島嶼学概論でグアムとミクロネシア連邦のピス島とウェノ島に行き、初めての海外ということもあって、見るものすべてが新鮮であった。現地の人々との交流では英語を話せない人もおり、言葉は通じなくとも、身振り手振りでコミュニケーションをとることが出来き、言葉だけが人と人を繋げるのではないと感じることが出来た。ミクロネシア連邦では現地の人々の生活や市場等を見学したり、文化や食事、無人島での狩猟採集などの体験から現地の文化や経済への理解を深めることが出来た。発展途上国の離島を初めて見たが、水道がなく井戸から水を汲んだり、発電機で夜の明かりにしたりと、日本では当たり前だったインフラの整った生活がどれだけ恵まれた生活か改めて考えせられた。このような生活を初めて体験したが、自身の生活がどれだけエネルギーや資源を無駄にしているかがわかり、私たちの生活からもっと無駄をなくし、環境に配慮した生活が出来るとはならないかと考えた。グアムでは現地の人々と交流したり、戦争記念館やグアム大学等での講義等でグアムの歴史や生活、チャモロ人の文化等への理解を深めた。戦争記念館では日本統治時代の海外の状況についても学び、これまで日本で学んできた戦争は日本が被害を受けた内容や状況などを学ぶことが多かったが、グアムの人々が戦争で日本人から受けた被害を知り、改めて日本も被害者、加害者の両者であり、戦争がいかに残酷なことなのか再認識できた。グアム大学のInoue教授からグアムについて講義をして頂き、社会福祉や教育、現地での生活や問題について聞き、日本との違いや見習うべき点などとても興味深く、自身の視野を広げる良い機会となった。また、今まで海外で働くということに対してあまり関心や興味はなかったが、Inoue教授自身の体験を聞き、大変なこともあるがとてもやりがいのある仕事だということがわかり興味がわいた。特に、発展途上現場での教育状況を実際に見聞きして一から教育の環境を整えていくことにとってもやりがいを感じ、興味がわいた。グアム・ミクロネシアでは観光業としてダイビング等の海での観光施設が発達し、ダイビングショップやそれに隣接したホテルが多くみられた。鹿児島県の島々も劣らないほどのダイビングスポットであるにも関わらず、あまりこういった施設が島々には少ないように感じるため、こういった施設の整備が今後の発展につながるのではないかと考えられる。海外の小さな島々を初めて見て、改めて日本の島々も様々な特徴にあふれる魅力的な場所であることを再確認もできた。今後、離島の自然を生かした産業を進めていくことが、地域活性化に大きく繋がるのではないかと感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今までは海外に行ってみようという気持ちはあったがどうしても行く勇気が出ずいけなかったが、今回の研修で初めて行く機会を頂いて、自分自身にとって大きな自信につながった。今回の経験を活かして、伝統的な文化や生活、自然を残しつつ、どのように発展していけばいいのか考え、少しでもできることを行動に移していきたい。また明日、自身の研究は今回研修したグアムやミクロネシアを含む、東南アジアでの研究が近年進んでいるため、これを機に海外での調査にも積極的に行っていきたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科 1年

氏 名: 吉良 友祐

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>グアムでは、観光産業の重要性を学んだ。島という環境において大量生産は、とうてい不可能であるため、最も効率がいい手段として島では観光産業が発達すると考えられる。またグアムでは太平洋戦争についての歴史を学んだ。特に太平洋戦争国立博物館では、日本という国を客観的にみることのできる機会であった。特に印象に残っているのは、アメリカと日本が戦時中に行っていた国内での情報戦略である。現在はインターネットの発達で外の情報を受信することは容易だが、当時国民の耳に入る情報は軍が流す情報しかなかった。特に日本の場合は大義名分を掲げ国のために死ぬべきだといった間違っただ情報を国内に流し続けていた。アメリカでも同じように日本人なら殺してもよいといった考え方が広まっていた。現在もそうだが閉鎖された空間というのはとても恐ろしいと改めて考えさせられた。グアム大学でInoue教授からお話を聞くことができた。観光地としてのグアムではなく、住む場所としてのグアムの話は大変興味深い話だった。ミクロネシア連邦チューク州ウェノ島・ピス島では生活を共にし、文化などを学んだ。ウェノ島のスーパーマーケットでは多種多様な輸入品があることがわかった。野菜を売っているコーナはとても狭く、需要が少ないと考えられる。ピス島にはスーパーマーケットなどがあるわけではない、食べるものが常にあるわけでもない、電気も基本は通っていない。日本と比べると生活のレベルは著しく低い。しかし彼らは不幸ではないと感じた。私の価値感について改めて考える機会になった。ピス島などは鹿児島の離島と違い気軽に立ち寄れる島ではないが、鹿児島県の島の多くは気軽に行くことができる。鹿児島県の島の多くがインフラの整備が行き届いていることなど違いを感じた。島での生活は不便が多かった。鹿児島県の島でもあえて不便な体験をしてもらい普段の生活のありがたさを実感してもらおう機会を作るのもおもしろいかもしれない。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>他国の人とのコミュニケーションに英語の重要性を痛感した。自分の英語能力を高めなければいけないと感じた。今までは自分の研究分野だけ勉強していればよいと思っていたが、他分野の内容も取り入れて広いアンテナをもって勉学に励もうと思う。また教師を目指す者として今回の経験を生徒に伝えていきたいと思う。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理工学研究科 1年

氏 名: 福島 浩太

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修ではグアムおよび、ミクロネシア連邦を訪れた。グアムは海外から観光に来る方も多く見られ、日本人観光客も多かった。また、ミクロネシアの島々と比べて、観光業による収入が多いことが目に見えて分かった。一方で、ピス島では電気や水道もないことから限られた物資や、島の外から持ち込まれる燃料などで生活が行われていた。はじめはこのような島で生活できるのか不安があったが、いざ2泊3日の生活をしてみると生活できないこともなく、普段の生活のようにお金さえ払えば何でも手に入ることだけが幸せではなく、そこにあるもので、生きていく人々がいることを知る良い機会になった。</p> <p>今回の海外研修が私にとって初めての海外へ行く機会になった。チューク州では、チューク語が母国語ではあるが、学校で英語を学んでいる小学生たちとも英語で交流することができた。周りの大人たちの影響も大きいとは思いますが自分よりも小さい子たちが英語を話せるという体験がとても刺激になり、私自身ももっと英語力を向上させたいと考えさせられる良い機会になった。</p> <p>ピス島での生活では島の外からの物資と、その他の食物は自給自足によって賄われていて、シュノーケリングを用いた貝類の採集やヤシガニなどの陸産甲殻類を採集する体験もさせていただいた。日本では口にすることのできないような現地の食べ物であったり、多くの体験をさせていただいた。島にいる間はスポーツドリンクどころかミネラルウォーターすら購入することができないため、ココナッツジュースなども水分補給をするための手段として重宝されていた。火を使うときには乾燥したココナッツの皮を燃やしたり、食事を盛る皿としてヤシの葉を使用したりしていて、ヤシの木の汎用性の高さに驚かされた。</p> <p>ミクロネシアやグアムではごみの再利用などの設備が整っておらず、プラスチック製品のごみのポイ捨てなどが目立っていた。また、缶などの金属製品も再利用されることはないため道端に投棄されているのを何度も見かけた。また、川などの淡水域が洗濯などに利用されていて嫌気化している様子が橋の上から目視で確認できた。日本も浄水施設が整備されるまではこのような河川が多かったのではないかと考えられる。インフラ整備はもちろんだが、環境教育などにもこれから力を入れる必要があると感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>広い視野を持って物事をみられるように、様々な国々の人々との交流や初めてのことにも進んで挑戦していきたいと考えようになった。また、英語力の向上は必要不可欠であると実感した。今後、海外に行く機会があれば、反省を活かしたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学研究科 修士2年

氏 名: 岩永 響希

授業科目名	太平洋島嶼学持論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>初めての海外の離島を訪れ、その島の暮らしや文化を知り、新たな国際感覚を身につけたい、鹿児島県の離島との共通点や相違点を学びたいという思いからこの研修に参加しようと考えた。</p> <p>ピス島という、空港のあるウエノ島から船で1時間ほどかかる離島で3日間過ごした。村に唯一ある小中学校では、資金や教材、スタッフが不足しており、満足な教育を受けられないようだった。島の子どもたちはあまり英語を話せないため、ボディランゲージで意思疎通を図ることが多かった。この島には商店がないため、米やガソリン、衣服などをウエノ島で購入し、船で運んでくる必要があり、たいへん不便だと思った。</p> <p>ウエノ島では私の予想に反し、日本人観光客が多くいたことに驚いた。ダイビングやシュノーケリングスポットとして人気なのだろう。その一方で、インフラ整備が発達しておらず、排水溝がなく、陥没した道が多いために車での観光が容易ではないと考えられた。また、至る所にビンロウの赤い唾が吐き出されており、観光客に不快感を与えるのではないかと思った。</p> <p>鹿児島県の離島と海外の離島とを比較した場合に共通して言えることは、産業の偏りとゴミ問題である。第一次産業に偏ってしまうのは「島」という性質上やむをえないものの、今後の技術発展による第二次、第三次産業の導入に期待する。ゴミ問題は繰り返し利用することができる袋や容器、そして規則や取り締まりを徹底して用いるべきだと考える。相違点としては、ゴミの分別が浸透しているかどうかであり、これは離島だけではなく、特に発展途上国に共通して言えることである。日本の大学およびJICAなどの協力によって分別する意識が人々に芽生えたとよいと思う。</p> <p>本土と違い、物が豊富ではなく、交通の便が悪いなかで、どのようにして毎日を充実させて生きていくのか、改めて考えさせられた研修であった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>教育や産業の偏り、ゴミの分別など離島で発生している問題は、その地域を実際に訪れて状況を知り、それぞれに対応した策を講じていく必要があると改めて考えるようになった。来年から離島や地方の農業を支える仕事に就くことになるが、この研修で得た教訓を生かし、その土地で暮らす人々と同じ目線で接し、生活や考え方を理解しながら、彼らの為になる仕事をしたいと考える。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者 河内雅弘

(学部または研究科・学年) 農学研究科 修士2年

氏 名: 河内 雅弘

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私は今回の太平洋島嶼学特論でミクロネシアやグアム島に行き、それぞれの島の様々な事柄を学んだが、その1つにゴミ問題がある。まず、ミクロネシアのウェノ島に赴いた際について目についたのが廃棄された車だった。私たちが宿泊したウェノ島のホテルの周りには廃棄された車はほとんどなかったが、そこから車で10分も移動すれば、道路のわきに廃棄された車が多くみられた。これは、ミクロネシアでは車をちゃんとした手順で廃棄、またはリサイクルできる施設がなく、グアムまでわざわざ持って行って廃棄するにしても費用がかかってしまうため、多くの人は道端に車をそのまま置き去りにして廃棄してしまうようだ。また、紙、ビン、ペットボトルなどのプラスチック製品、生ごみなどもすべてひとまとめに捨てられており、分別がされていないようだった。グアム大学で教師をされている先生にお話を伺う機会があり、その先生から、グアムでのゴミ問題について聞くことができた。グアムでは現在「燃えるゴミ」と「燃えないゴミ」の分別しかなく、資源ごみのリサイクルについてもまだまだ進んでいないようだ。私は昨年に硫黄島や中ノ島に行く島嶼学の講義を受講したが、それらの島でも、ゴミの不法投棄やごみの処分場が島にないことなどが問題となっていた。今回私はこの講義を通して島嶼におけるゴミ問題が日本だけでなく世界の島々でも起きていることを学ぶことができた。また島嶼においてごみの処分場や収集場の整備、リサイクル技術の導入と普及などが必要であると感じた。</p> <p>コミュニケーションについても学んだ。私は英語があまり得意ではないが、グアムやミクロネシアでは多くの方が英語を話していたので上手くコミュニケーションできるか不安だった。グアムで現地の方と夕食を食べているときに、現地の子供たちがグアムの踊りを披露してくれたお返しとして、私たちはソーラン節を踊った。現地の方はとても喜んでくれて、子供たちとも一緒に踊り、共に楽しい時間を過ごすことができた。この経験から私は言葉がわからなくても、言葉以外でコミュニケーションをとる方法はたくさんあるということを再認識した。常に言葉が通じる日本にずっといると忘れてしまいがちだが、今回の研修で実感することができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修を通して自分に足りないと思ったのは、第1に英語力だ。言葉以外の身振り手振りなどでコミュニケーションをとることもできるが、最も簡潔で確実に意思疎通を図る方法はやはり言葉であり、今回の研修でも英語力が足りないことで上手く伝えられなかったり、相手の言いたいことがわからなかったりする場面があった。また、今回はグアム、ミクロネシアでの研修だったが、機会があればぜひ他の日本や海外の島々を見てみたいと思った。そこで、これからは英語力を鍛え、様々な島を訪れることを抱負としたい。</p>	

平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学研究科 修士2年

氏 名: 古川 あずさ

授業科目名	太平洋島嶼学持論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国準州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月9日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>日本ではほぼ当たり前存在するインフラがなくなったとき自分はどう行動するのかわからなかったが、ピス島では案外快適に生活できたと思っている。それは、ピス島にはもともとインフラがあまり充実しておらず、生活の仕方が確立されていたこと、そして現地の方々の手厚い歓迎のおかげで成り立ったと考えている。そう考えると、日本全国で突然インフラを断ってしまったとき、生活をするにはほぼ無理だろうと思う。水は川の上流に行くと汲むことができるかもしれないが、そこに行くまでの道のりはどうやって移動するのか。どこに水があるかという情報はどこで得るのか。周辺に生えている動植物で食べることのできるものを見分けることはできるのか。トイレはどこでするのか。火はどうやって起こすのか。そのようなことを考えると、日本でそんな状況になったとき、私は生きられないだろうと思った。物が充実していないからその現地の方の逞しさと日本人の生活基盤の危うさを感じることができたのは、今回の研修で得ることのできた成果の一つだと考える。</p> <p>今回衝撃を受けたことの一つに、太平洋戦争記念館でグアムが日本軍に統治されていたころの資料を読んだときのことを挙げる。第二次世界大戦中の日本軍の統治は現地の人々をないがしろにしたものであったという資料が多く、日本人としてはあまり居たくないような気分になった。日本に住んでいては戦争で日本が他国に何をしたかについて知る機会は少なく、原発や疎開など国内の被害について知ることが多く、一つの国で得られる情報は意図的か無意識か、偏ったものになってしまうことを知れる経験になった。また、この記念館を見て、現地の人々は日本軍から助けてくれたアメリカに対して感謝しているのだろうと思った。しかし、Inoue-Smith先生に現地の人々のアメリカに対する感情について尋ねると、それほどいいわけではないことを教えていただいた。どうしてそうなのか、まだよくわからないが今後も考えていきたいと思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回のミクロネシア連邦・グアム訪問で私は自分の視野の狭さに気づいたような気がする。自分が今まで生きてきた環境の常識では測れない、想像できないことがあることを思い知った。自分の生きている環境に縛られないよう世界に関する情報収集や実際に赴き新しい視点を得ることができるようになりたい。また、この訪問で海外に友人を作ることができ、SNSを交換しメッセージのやり取りができているのでこのつながりを大切にしたいと思う。</p>	